

「西洋と日本の『プラントハンター』が描いた夢」に 関する報告

門松 秀樹

東北公益文科大学総合研究論集第45号 抜刷

2023年7月31日発行

シンポジウム等記録

「西洋と日本の『プラントハンター』が描いた夢」に関する報告

門松 秀樹

1 「西洋と日本の『プラントハンター』が描いた夢」の趣旨について

令和5年（2023）3月14日及び21日の両日、東北公益文科大学鶴岡キャンパスにおいて、「西洋と日本の『プラントハンター』が描いた夢」が開催された。本企画は、鶴岡タウンキャンパスを所在とする東北公益文科大学大学院、鶴岡市（致道ライブラリー）、慶應義塾大学先端生命科学研究soによる連携企画である「市民と学ぶ 今の私たちが未来に繋ぐ、繋がるということ」の第1回目の企画となる。

鶴岡タウンキャンパスという研究・教育における拠点は、市民にとって有用な知的資源でもある。学術研究の成果を、分かりやすく、また親しみやすい形で市民に還元することで、市民が自らの知的好奇心を充足し、鶴岡タウンキャンパスに対する市民の関心をより高めていくことで、各研究機関に対する理解も深化し、その研究活動も一層活性化していくと考えられる。このため、まずは、サロンのようなイメージで、気軽に市民が参加することができ、楽しみながら知的好奇心を満たすことができるように本企画が開催された。

3月14日及び21日の両日ともに、冒頭に武田真理子東北公益文科大学大学院研究科長より、本企画についての開催趣旨が説明された後、14日は遠山茂樹東北公益文科大学名誉教授より、「西洋のプラントハンターが描いた夢」と題する講演が、また、21日は門松秀樹東北公益文科大学准教授より、『らんまん』モデル 牧野富太郎の生涯」と題する講演がそれぞれ行われた。

以下に、「西洋のプラントハンターが描いた夢」及び『らんまん』モデル 牧野富太郎の生涯」のそれぞれの講演の概要について報告する。

2 「西洋のプラントハンターが描いた夢」

「プラントハンター (plant hunter)」という言葉は比較的新しい言葉であり、例えば、『英和中辞典』などには項目の記載がない。元々は、「plant collector」もしくは「botanical collector」と言われていたが、人跡未踏の地に分け入り、人類がまだ見たことのない新しい植物を手に入れようとすることから、探検家としての要素が加わって「ハンター (hunter)」という言葉が用いられるようになったのだろう。しかし、しだいに「プラントハンター」の定義は拡大し、「植物への情熱を持ち、自分の足で収集する人々」を指すようになって現代に至っている。

19世紀頃までは、薬用植物などの関係から植物学と医学が未分化の状況にあったため、植物学者と医師は同義であった。よって、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトやカール・フォン・リンネ、カール・ペーテル・ツンベルクなどの著名な植物学者たちは医師でもあった。

「プラントハンター」の歴史を見ると、18世紀後半から20世紀初頭にかけてのイギリスに多く見られる。これは、イギリスの植民地拡大期であり、いわゆるヴィクトリア朝時代が最も盛んに「プラントハンター」たちが活躍していた。当時、植物は資源と見なされており、ゴムノキのような「有用植物 (economic plants)」の獲得が求められたことが背景にある。

イギリスは、「有用植物」獲得のために植民地に植物園を設置しており、例えば、ニュージーランドのウェリントンの植民地植物園などが著名である。なお、ウェリントン植民地植物園が英本国におけるシダブームにあわせてさまざまなシダを送ったことで、シダは現在もニュージーランドを象徴する植物の一つとなっている。

他方、産業革命の進展に伴って誕生した労働者たちの娯楽として、ドッグレースの他に、花の栽培や品評会などが盛んに行われ、19世紀のイギリスは園芸熱が非常に高まっていた。このため、「有用植物」だけでなく観賞植物の獲得も重視されており、元来、イギリスの固有種である植物は200種程度であったと考えられるが、18世紀には7000から1万種、19世紀には1万8000種もの植物が植民地からイギリスに持ち込まれている。

イギリスにおける園芸熱の高まりは、ジョージ3世の王妃であるシャーロットの影響も大きく、シャーロットは、イギリス最大の植物園であるキュー植物園をジョージ3世の母であるオーガスタより継承し、その拡充に尽力している。そうしたこともあって、キュー植物園長のジョセフ・バンクスはジョージ3世の「プラントハンター」として知られている。なお、イギリスにクリスマスツリーの習慣を持ち込んだのはメクレンブルク出身のシャーロットであったと言われている。こうした園芸熱の高まりにより、貴族の間では庭園に外国の樹木を植えることが流行した。例えば、ダグラスモミやクロマツ、ヒマラヤスギなど、19世紀半ばのイギリスでは針葉樹ブームが起きている。

なお、英本土とは気候が異なる植民地の植物の栽培にはさまざまな苦勞があったようである。英本土でオオオニバスの開花に成功したのはチャッツワース庭園であり、英国最大のキュー植物園ではなかった。これは、当時、キュー植物園が引いていたテムズ川の水質汚染が著しかったことと、寒冷な気候の影響などがあったと考えられる。チャッツワース庭園では、原産地の南米ギアナと同様の気温・水温を維持できるように、鉄骨とガラスで巨大な温室を建設した。ちなみにこの温室を設計したジョセフ・パクストンは、第1回ロンドン万博のパビリオンの建築も担当しているが、チャッツワースの温室と同様に鉄骨にガラス張りのパビリオンを建設している。

イギリス貴族たちの園芸熱は、自然を再現して表そうとするイングリッシュガーデンの隆盛をもたらした。なお、外国の針葉樹を庭園に植えて邸宅の装飾とすることは当時の貴族にとって一種のステータスシンボルとなったが、森や林を再現するには灌木も必要となる。こうして、19世紀半ばのイギリスではイングリッシュガーデンに植えるための灌木としてシャクナゲやツツジが大ブームを巻き起こした。世界有数の銀行家として知られるライオネル・ロスチャイルドもシャクナゲ愛好家の一人であり、「趣味は銀行家（banker）、本業は造園家（gardener）」という言葉を残すほど、園芸に熱心であった。

ところで、「プラントハンター」たちが世界各地から収集した「有用植物」は、イギリスの植民地政策に関わる「植物戦略」を生み出していった。例えば、南米原産のパラゴムノキをインド・セイロンに移植し、さらにマレーシアに展開したことで大規模な天然ゴムのプランテーションが形成された。同じく南米

原産のキナノキを東南アジアに移植したが、キナノキは熱帯の風土病であるマラリアの特効薬となるキニーネの原料となる。熱帯に展開するイギリス植民地のマラリア対策として、キナノキの移植は進められた。ポリネシア原産のパンノキは、奴隷の食料として期待できるとして西インド諸島に移植され、現在でもジャマイカなどでは食用とされている。中国のチャノキをインドのダージリンなどに移植して紅茶の産地として発展させたことも、かかるイギリスの「植物戦略」の一環である。インドにもアッサム地方にチャノキは自生していたが、茶葉としたときの品質は中国産のチャノキが優れていたため、中国産のチャノキをインドに持ち込んだのである。

イギリスの「植物戦略」を支え、世界各地に「プラントハンター」を派遣したのは、キュー植物園、園芸業者であるヴィーチ商会、東インド会社などである。

ヴィーチ商会の「プラントハンター」としては、ロブ兄弟とアーネスト・ウィルソン、ジョン・グールド・ヴィーチが有名である。ロブ兄弟の兄のウィリアムは主に南北アメリカ大陸で活躍し、ジャイアントセコイアやモンキーパズルツリーをイギリスにもたらした。弟のトーマスはインドや東南アジアで活躍し、ボルネオの食虫植物やインドの青い蘭をイギリスにもたらした。青い蘭は、当時、1株に300ポンドの値が付けられたが、これは中流階級の家庭の年収に相当する金額である。ウィルソンは2000種に及ぶアジアの植物を欧米に紹介しており、その中には日本のクルメツツジも含まれている。ジョンは、ヤマユリをはじめとする日本のユリをイギリスにもたらし、イギリスにおけるユリブームを牽引した。

東インド会社の「プラントハンター」としては、ロバート・フォーチュンが知られている。フォーチュンは中国のチャノキをインドに移植した中心人物であったが、黒色茶（紅茶）と緑茶は同一の植物で、茶の製造過程における発酵の度合いが異なるだけであることを解明した人物でもある。植物分類学の大家であるリンネは、黒色茶と緑茶を異なる植物であると見なしていたため、フォーチュンはリンネの誤りを正したことになる。また、フォーチュンは日本からコウヤマキやアオキを紹介している。特に、雌雄別株であったアオキの雄株を持ち帰ったことで、雌株のみ知られていた欧米において、初めてアオキを

結実させることに成功している。

キュー植物園では、植物画家として知られるマリアンヌ・ノースが著名な人物である。ノースはキュー植物園長のジョセフ・フッカーや進化論で有名なチャールズ・ダーウィンなどと友人関係にあり、彼らと情報交換をすることで、珍しい植物の植物画を多く描いている。また、チャールズ・マリーズは、イザベラ・バードの前年に来日しており、バードの通訳を務めた伊藤鶴吉はマリーズの通訳も務めている。バードが東北・北海道を巡遊するよりも前に、マリーズも東北・北海道を巡遊しているが、当時の日本では外国人の遊歩区域は制限されていたため、日本国内を巡遊することができたマリーズやバードの人脈は英国公使館などにも及んでいたことが考えられる。

幕末から明治初期にかけて、多くの「プラントハンター」が来日し、日本の植物を欧米に紹介しているが、当時、ヨーロッパの芸術界を席卷していたジャポニズムに関して、植物も大きな影響を与えており、「花のジャポニズム」とも言うべき状況が見られたのではないだろうか。

3 『らんまん』モデル 牧野富太郎の生涯

「プラントハンター」としての定義である「有用植物」の収集を満たす者は、日本にはほとんどいないといえる。このため、日本の植物相を明らかにするために日本のほぼ全域にわたって植物収集を行った、植物学者の牧野富太郎を採り上げることとした。

まず、牧野の生涯を概観する。

牧野は文久2年（1862）4月に土佐国高岡郡佐川村（現在は高知県高岡郡佐川町）の造り酒屋（「岸屋」）に生まれる。牧野の幼少期は、4歳の時に父を、6歳の時に母を、7歳の時に祖父を次々と失う悲劇に見舞われたが、祖母によって養育された。また、体が弱くすぐに熱を出したことなどが自叙伝などにも記されている。

牧野が学問に初めて触れたのは11歳の時で、最初に土居謙護が開いていた寺子屋に通い始め、同年には、佐川の領主である深尾氏の学問所である名教館で教授を務める伊藤蘭林の私塾でも学び始める。翌年、牧野家が代々名字帯刀

を許される豪商であったことから、特別に名教館に通うことを許されている。明治7年（1874）、牧野が13歳の時に、学制に基づいて佐川にも小学校が創設され、名教館が廃校となったため、牧野は佐川小学校に通う。しかし、2年後には牧野は小学校を退学する。その後、明治12年に高知の漢学塾である五松学舎などで学ぶが、公的な教育機関で牧野が教育を受けたのは、明治7年から9年まで下等小学の2年間のみであった。それゆえに、牧野といえば「小学校中退」の学歴とされている。

牧野はその後、独学で植物学を学び、明治14年には第2回内国勸業博覧会の見物と、顕微鏡や参考書の購入のため、初めて上京する。その際に、博物館で植物学を研究する田中芳男・小野職懿を訪ねて両名の知遇を得ている。

明治17年に二度目の上京を果たすと、牧野は東京大学理学部植物学教室を訪ね、矢田部良吉教授及び松村任三助手らから植物学教室への出入りを認められた。牧野は、東京での研究生活を本格化させていき、明治20年には『植物学雑誌』の創刊、明治21年には『日本植物志図篇』第1巻第1集を刊行するなど、研究成果の発表を進めていく。明治22年には、植物学教室助教授の大久保三郎との共同研究により、新種の植物に「ヤマトグサ」の学名を付け、『植物学雑誌』に発表した。これは、日本人が日本の学術雑誌において学名の命名を行った最初の事例であった。その翌年には、東京の小岩でムジナモを発見するなど、牧野の研究は躍進するが、矢田部と衝突して植物学教室の出入りを禁止されている。

牧野の家庭面に目を向けると、明治23年には小沢寿衛子と結婚するが、明治20年に祖母が亡くなり、経営の柱を失った実家の「岸屋」が明治24年に倒産したこともあって、同年に実家の家財整理のために佐川に帰郷している。

その間に、牧野と衝突していた矢田部は大学内の対立が原因で帝国大学（明治19年に帝国大学令により東京大学は帝国大学に改組。明治30年に京都帝国大学が設立されたことで、以降は東京帝国大学となる。一筆者註）を非職となり、代わって植物学教室教授に就任した松村は牧野を助手として大学に呼び戻した。もっとも、牧野と松村の関係もしだいに悪化していき、明治45年には牧野は助手を免職されている。しかし、牧野を擁護する植物学教室の面々が総長に直談判を行うなどしたため、同年、牧野は講師として東京帝大に再び任用

されている。

昭和元年（1926）、牧野は東京府北豊島郡大泉町（現在は練馬区大泉）に転居する。その自宅や庭は、現在、練馬区立牧野記念庭園となっているが、収集した植物標本などを収蔵できるように寿衛子夫人が中心となって準備を進めたと、牧野は自叙伝で述べている。昭和2年には、牧野は東京帝大より理学博士号を授与され、研究者としての実績を大学に評価されたが、その翌年に寿衛子夫人が病没してしまう。夫人病没の前年に仙台で発見した新種の笹に夫人の名を冠したのは、非常に有名な話である。

牧野はその後、昭和14年に東京帝大講師を辞職する。太平洋戦争末期には山梨県への疎開を余儀なくされるが、戦後、皇居に招かれて昭和天皇に植物学を進講したほか、昭和25年には日本学士院会員に推薦され、さらにその翌年には第1回文化功労者となり、没後に文化勲章を授与されるなど、多くの栄誉を受けた。

「プラントハンター」としての牧野の活動について、伊藤洋氏の「標本ラベルから逆にたどった牧野富太郎博士の採集年表」（『植物研究雑誌』第49巻第9号）に基づいて整理すると、最初に上京した明治14年以降、終戦後の昭和23年に至るまで、ほぼ毎年、北海道利尻島から奄美大島・小笠原諸島に至るまでの日本各地で植物採集をしていることが明らかになった。

ところで、牧野は「小学校中退」の学歴であることはよく知られているが、いわゆる「学校歴」ではなく、何を学んだのかという点における「学問歴」を確認したい。牧野の自叙伝に基づいてその「学問歴」をたどると、着目すべきは名教館における教育であろう。福沢諭吉の『世界国尽』をはじめ、地理・天文・物理などを学んでいる。さらに、名教館在学中に「英学会」に入会し、英語の原書で「地理・天文・物理」や世界史、英文法を学んでいる。これは、各藩の藩校などで「洋学」として学ばれていたものとはほぼ同等のテキストを使用しており、さらには『ウェブスター大辞典』などを用いて原書を翻訳しながら学んでいたことが分かる。すなわち、牧野は小学校入学以前に、幕末の藩校における「洋学」と同水準の学問を学んでいる。よって、「五十音から更めて習う」小学校の内容に退屈し、意味を見出し得なかったがゆえに中退したと考えるべきであろう。さらには、明治12年に高知の五松学舎に遊学した際には、塾

での勉強よりも、高知師範学校教師の永沼小一郎に植物学を学び、植物学の基礎知識を身に付けている。つまり、牧野の「学校歴」は小学校中退であるが、その「学問歴」としては、藩校において教授されていた「洋学」と同等の知識を身に付けており、極めて高い教育を受けていたとみることができよう。ゆえに、牧野は東京大学植物学教室への出入りを許され、学会誌に掲載される水準の論文を日英両語で執筆することができたのである。

一方、牧野が訪ねた頃の東京大学理学部植物学教室のスタッフは、どのような陣容であったのだろうか。まず、矢田部であるが、江川太郎左衛門の弟子の砲術家であった矢田部郷雲の子として生まれ、江戸幕府開成所で中浜万次郎や大鳥圭介から英語を学び、明治以降は東京大学の前身の一つとなる開成学校で教授・試験補や少助教・中助教を務めた。その後、アメリカのコネル大学に留学して植物学を学んでいる。コネル大学卒業後は、開成学校の教授となり、東京大学設立時には理学部の教授となっている。

次に、助手の松村であるが、常陸松岡藩の家老の子として生まれ、維新後、各藩からの派遣学生である貢進生として東京大学の前身となる大学南校で学び、東京大学の設立時には助手として小石川植物園に勤務している。また、同じく助手の大久保は大久保一翁の子であり、明治4年にアメリカのミシガン大学に留学して植物学を学び、さらにイギリスで植物学を学んでいる。帰国後は内務省や宮内省に勤務したが、明治14年に東京大学御用掛に転じ、植物学教室の助手となっている。なお、前述の通り、松村は後に教授に、大久保は助教授となっている。この他には、幕末における本草学の大家として知られ、シーボルトから直接教養を受けたことでも有名な伊藤圭介が、政府によって明治8年に小石川植物園に登用され、明治14年には東京大学員外教授となっている。

牧野を迎えた植物学教室のスタッフは、欧米への留学経験や、明治政府によって設置された最高学府である大学への在籍、あるいは江戸時代以来の名声など、外見上、分かりやすい「権威」を手にしていた。一方、牧野は大学において、約45年にわたって助手・講師に留められ、助教授・教授といったポストに就くことはなかった。言うなれば、「学問歴」そのものよりも「学校歴」など、一種の権威として機能する「学歴」が牧野を「アマチュア」に留め、「アカデミア」に加わることを阻んだ。しかし、研究者としての能力や才能は、

「アマチュア」であるか「アカデミア」であるかに関わらず、本人の能力によって決まるものであり、また、本来は評価もその業績によってなされるべきであろう。

最後に、牧野と東北地方、特に庄内地方について述べる。前述の伊藤洋氏の研究を基に牧野の東北・北海道への採集旅行の回数を確認すると、延べ19回、そのうち庄内地方は鳥海山への2回であった。一方、九州は延べ64回に及んでおり、明らかに東北・北海道よりも頻繁に九州へと足を運んでいる。これは、牧野の経済状況と関係があると考えられる。牧野は、助手・講師の薄給ゆえに、生活や研究のために多額の借金をしていたことはよく知られている。ゆえに、採集旅行の費用の確保が難しく、各地の植物愛好家による採集会の講師として招聘され、交通費や謝礼などを得られるところに多く採集旅行に出かけている。特に九州には「六年も続けて行った」ということであった。なお、牧野自身は、高山植物の中でも日本の固有種を特に珍重しており、コウシンソウ・タカネスミレ・ナンブトラノオ・ナンブナズナ・メアカンキンバイ・オヤマノエンドウの6種の名を挙げているが、コウシンソウ以外の5種は、東北・北海道に自生する高山植物である。採集旅行の回数は少ないが、牧野にとって東北・北海道は貴重な植物が自生する魅力ある地域だったといえるのではないだろうか。